－所蔵作品紹介－

神田　一明　KANDA Kazuaki

静物（A）

せいぶつ(A)

作品データはこちら

神田一明は東京に生まれ、1945年一家で北海道鹿追町に入植した。1959年に東京芸術大学美術学部油画科を卒業、1961年より北海道教育大学旭川校で教鞭をとるとともに、全道展および行動展に出品を続け、現在両展の会員となっている。

彼が長く力を注いできた題材は、室内の静物である。つまり具象絵画なのだが、かつて「私の造形は抽象絵画から始まる」*1と語ったように、彼はあくまでモダンな造形思考に拠るコンポジションとして自らの絵画を成り立たせようとしてきた。そのコンポジションを作り上げて行く過程のある瞬間、「奇跡に近い美しさ」*2があらわになる、と彼はいう。思うに画家神田一明を駆りたててきたのは、そんな美しさへの感動と希求である。

ここにあげた作品は第20回安井賞展（1977年）に選抜され、ベスト４まで残った。モティーフの多くはシルエットで判別できるものの、それほど具体的に描かれていない。むしろ手応えのある存在感を遠のけて、代わりに気配のようなものを表すのがねらいのようだ。それも、どこか不穏さを帯びた気配である。モティーフのやや雑然とした斜線上への配置、落ち着かない筆触、椅子の下に広がる謎めいた黒っぽい色面などが、紫に染め上げられた濃密な空間に立ち込める何かをそう感じさせる。

作者にとっても「ひとつの造形言語を身に付けたという実感」*3があったというが、彼のこの後の制作から振り返ってみると、それは物の実在感よりもむしろ気配を通して何かを語り得るという確信ではないだろうか。もう少し筆者なりに言い換えると、「影」としての絵画表現という認識である。影とは消極的な意味で使っているのではない。現実の面影を宿しつつ別個の自律した世界として、散文的な日常に対する詩的な空間として、そして白日にさらされた現実に対する翳りを帯びた存在としての、「影」である。彼の求める美しさは、この「影」の領域からやってくるのだ。

*引用は１神田一明「作者のことば」（『朝日ジャーナル』20巻48号、1978年12月）、２および３神田一明「私の一点」（『北海道新聞』1995年４月28日夕刊）より。

「北海道立旭川美術館コレクション選集1982-1997」（1998年３月発行）より